

小児の病気

19-1209 甲斐 まなみ

19-1238 松井 稚奈

呼吸器系

- [急性気管支炎\(小児の症状・治療\)](#)
- [肺炎\(小児の症状・治療\)](#)
- [結核\(小児の症状・治療\)](#)

急性気管支炎(小児の症状・治療)

急性気管支炎って？

急性気管支炎は気管支や気管に炎症が起きる病気です。

多くの場合は風邪に続いて急性気管支炎になります。

ウイルス感染によるものが多いですが、マイコプラズマや細菌が原因であることもあります。

炎症が太い気道から細気管支へと進行すると、急性細気管支炎となり呼吸困難症状が強くなります。

肺炎(小児の症状・治療)

肺炎って？

肺炎は感染性肺疾患の一つで、肺に病原体が入って炎症を起こす病気です。この炎症は肺の中でも、肺胞や肺胞の周辺にみられます。

肺の炎症は主に微生物の感染によって引き起こされますが、その微生物の種類によってそれぞれ肺炎の特徴があります。

主にウイルス性肺炎、マイコプラズマ肺炎、細菌性肺炎、クラミジア肺炎に分類されます。

結核(小児の症状・治療)

結核って？

肺結核は肺に結核菌が感染することによって引き起こされる病気です。

それでは結核菌はどのようにして感染するのでしょうか？

小児の結核菌の感染は、主に感染している家族の咳によって飛沫感染します。そのため接触するだけでは感染することはありません。

結核菌は感染しても発病するのではなく、体の抵抗力が低下したときに発病するといわれています。

しかし赤ちゃんの場合は抵抗力が弱いために、すぐに発病することが多いです。

アレルギー系

- [アトピー性皮膚炎\(小児の症状・治療\)](#)
- [アレルギー性鼻炎\(小児の症状・治療\)](#)
- [食物アレルギー\(小児の症状・治療\)](#)

アトピー性皮膚炎(小児の症状・治療)

アトピー性皮膚炎とは？

アトピー性皮膚炎はアレルギー疾患の1つといわれており、アレルゲンといわれる物質に対して皮膚に炎症がおこる病気です。

アレルゲンは、アレルギーを引き起こす原因物質で、例えばダニ、ほこり、花粉などがあります。

もちろん人それぞれですし、気候の変化や心理的ストレスで起こる人もいます。

小児は皮膚が弱いため、アトピー性皮膚炎を起こす小児が多いです。

アレルギー性鼻炎(小児の症状・治療)

アレルギー性鼻炎とは？

アレルギー性鼻炎とはアレルギーによって、鼻粘膜に炎症が起きる病気です。

アレルギー疾患の1つで、小児のアレルギーは花粉の他にも、ダニ、ホコリ、などが原因となることがあります。

小児のアレルギー性鼻炎の原因が花粉の場合はマスクの使用が有効ですが、ダニやホコリの可能性がある場合は部屋をこまめに掃除することが大切です。

食物アレルギー(小児の症状・治療)

食物アレルギーとは？

食物アレルギーとは、ある食べものが原因でアレルギーを引き起こす病気です。

アレルギーの原因になりやすい食べものには、卵、牛乳、そば、大豆、小麦、エビなどがあり、そのほかにも人によって様々です。

小児の食物アレルギーは、特に卵、牛乳、大豆であることが多いといわれています。

皮膚系

- [とびひ\(小児の症状・治療\)](#)
- [あせも\(小児の症状・治療\)](#)
- [じんましん\(小児の症状・治療\)](#)
- [赤ちゃんのにきび\(症状・治療\)](#)

とびひ(小児の症状・治療)

とびひとは？

とびひは、大人はうつりませんが小児が感染しやすい皮膚病です。

ブドウ球菌や連鎖球菌が原因となる感染菌で、子供の間では非常に感染が強い

す。

傷口から細菌が入り込んで炎症を起こし、体中のいたるところで発生します。

あせも(小児の症状・治療)

あせもとは？

あせもとは汗が出てくる汗腺に炎症が起きて、赤いぶつぶつができる状態をいいます。

小児の場合は新陳代謝が活発で、汗をかきやすいため大人よりもあせもになりやすいです。

あせもができる原因ですが、皮膚の表面に汗が覆うことで、皮膚の角質やホコリで汗腺つまって炎症を起こします。

じんましん(小児の症状・治療)

じんましんとは？

じんましんとは、皮膚に突然赤い湿疹がみられる状態をいいます。

じんましんを引き起こす原因は様々で、体に何らかの刺激を受けてヒスタミンが分泌されることでじんましんを引き起こすことが多いです。

食べ物によるアレルギーでじんましんが起きることが多いですが、そのほかにもストレスや温度、薬、ウィルスなど様々です。

赤ちゃんのにきび(症状・治療)

赤ちゃんのにきびとは？

赤ちゃんのにきびは新生児ざそうのことで、赤ちゃんの額や頬にニキビができます。なぜ赤ちゃんにニキビができるかというと、生後 3 ヶ月までには赤ちゃんは男性ホルモンを大量に分泌するため、皮膚にある皮脂腺が活発になって、皮脂の分泌が盛んになるからです。

感染症

- [インフルエンザ\(小児の症状・治療・予防接種\)](#)
- [麻疹・はしか\(小児の症状・治療\)](#)
- [おたふく風邪\(小児の症状・治療\)](#)
- [手足口病\(小児の症状・治療\)](#)

インフルエンザ(小児の症状・治療・予防接種)

インフルエンザって？

インフルエンザはインフルエンザウイルスによって引き起こされる感染症です。

インフルエンザウイルスには A 型、B 型、C 型のウイルスがあります。これらインフルエンザウイルスは変異するため、私たちは何度もかかってしまいます。

麻疹・はしか(小児の症状・治療)

麻疹・はしかとは？

麻疹(はしか)とは小児が麻疹ウイルスに感染することで発症する感染症の1つです。

麻疹の感染は人のくしゃみや咳などで感染する飛沫感染でおこり、その感染力は予防接種していないと感染するほど非常に強いものです。

そして、麻疹(はしか)は小児が重症化しやすい感染症です。

おたふく風邪(小児の症状・治療)

おたふく風邪とは？

おたふく風邪は、流行性耳下腺炎やムンプスとも呼ばれる感染症で、ムンプスウイルスの感染によって発病します。

おたふく風邪は、患者さんのほとんどが9歳以下の小児が感染する子供の病気で、おたふくのような顔に腫れあがります。

おたふく風邪で注意が必要なのは合併症です。

合併症には耳下腺炎、睾丸炎、卵巣炎、髄膜炎、脳炎、永久難聴などがあります。

手足口病(小児の症状・治療)

手足口病とは？

手足口病とは、手、足、口に発疹が生じる夏風邪の 1 つです。

手足口病はコクサッキーウイルスやエンテロウイルスが原因で、感染した人のくしゃみや席で感染する飛沫感染です。

1～4 歳の小児がかかりやく、春から夏場に発症することが多いです。

心

- [注意欠陥/多動性障害\(小児の症状・治療\)](#)
- [自閉症障害\(小児の症状・治療・予後\)](#)
- [アスペルガー症候群\(小児の症状・治療\)](#)
- [一過性チック障害\(小児の症状・治療・予後\)](#)

注意欠陥/多動性障害(小児の症状・治療)

注意欠陥/多動性障害とは？

注意欠陥/多動性障害とは AD/HD とも呼ばれ、注意力散漫・衝動性・落ち着きがない多動性の3つの症状が特徴で、社会生活に支障が及ぼす障害のことをいいます。この ADHD は小学生の 3%～5%と多く、男の子の方が多小児の病気です。

この3つの特徴的な症状の中で、どの症状が強いかによって、「不注意散漫型、多動性・衝動性優勢型、混合型」というように分かります。

自閉症障害(小児の症状・治療・予後)

自閉症障害とは？

自閉症障害とは、広汎性発達障害に分類される病気で、社会性、行動などが年齢相応に発達しない状態のことをいいます。

自閉症の有病率は約0.1%で、男女比で比較すると男の子:女の子が4:1で男の子に多い病気です。

自閉症の原因としては、遺伝的要因、誕生前後の問題など様々な要因が考えられていますが、詳しい原因は解明されていません。

アスペルガー症候群(小児の症状・治療)

アスペルガー症候群とは？

アスペルガー症候群は広汎性発達障害の1つで、自閉症と同じく対人関係の障害や常同行動なども見られますが、言語能力や認知機能の発達には遅れがありません。

アスペルガー症候群は遺伝的要因、誕生前後の問題など様々な要因が考えられていますが、詳しい原因は解明されていません。

一過性チック障害(小児の症状・治療・予後)

一過性チック障害とは？

「チック」とは突然起こる反復性の運動や発声のことです。例えば、肩すくめ、瞬き、咳払い、舌打ち、喉を鳴らすなど様々で、無目的・無意識に突然起こります。

チック障害は4歳～11歳の男の子に発症しやすく、全体で約1%の有病率であるといわれています。

そしてチック障害には症状と発症している期間から、一過性チック障害、慢性チック障害、トゥレット障害に分類されます。

一過性チック障害は運動チックまたは音声チックが、一日に多数、そして症状が4週間以上続きます。

喉・口

- [咽頭炎\(小児の症状・治療\)](#)
- [扁桃炎\(小児の症状・治療\)](#)
- [単純ヘルペス](#)
- [口内炎\(小児の症状・治療\)](#)

咽頭炎(小児の症状・治療)

咽頭炎とは？

咽頭炎は喉頭の粘膜に炎症がおきている状態をいいます。

喉頭は気管と食道の境目にあり、発声、呼吸、気道への飲食物の侵入を防ぐ働きをします。

一般的に風邪と同じウイルスによって咽頭炎になりやすいですが、空気の乾燥や、熱湯なども刺激となって咽頭炎を引き起こすことがあります。

扁桃炎(小児の症状・治療)

扁桃炎とは？

扁桃炎とは扁桃に炎症が起こる状態です。

扁桃とは口をあけたときに見える喉奥の口蓋扁桃といわれるものです。

扁桃炎の原因は、風邪に続いて起こることが多く、溶血性連鎖球菌、黄色ブドウ球菌、肺炎双球菌、ウイルスなどによる感染で炎症を引き起こることも多いです。

幼児期の小児は扁桃の機能が活発になるため、扁桃炎をおこしやすいです。

単純ヘルペス

単純ヘルペスとは？

単純ヘルペスは、単純ヘルペスウイルスによって発病します。

ただし、体にヘルペスウイルスを持っていても普通は症状を表しません。

それは、体が免疫力を持っているためで、ウイルスの働きを抑えているからです。

発症するのは、疲労やストレスなどによって免疫力が低下したとき起こり、再発を繰り返す特徴を持ちます。

口内炎(小児の症状・治療)

口内炎とは？

口内炎とは口粘膜に起こる炎症のことをいいます。

口内炎はいろいろな原因で起こり、アレルギー、ビタミン欠乏、細菌やウイルスの感

染など様々です。

小児は大人よりも唾液の分泌が弱く、口粘膜も弱いいため、小児の方が口内炎を起こしやすいです。

耳・鼻

- [急性鼻炎\(小児の症状・治療\)](#)
- [アレルギー性鼻炎\(小児の症状・治療\)](#)
- [慢性中耳炎\(小児の症状・治療\)](#)
- [難聴\(小児の症状・治療\)](#)

急性鼻炎(小児の症状・治療)

急性鼻炎って？

急性鼻炎は風邪を引いたときに起こります。

風邪のウイルスや細菌が鼻の奥で炎症を起こすことが原因です。

慢性化すると治りにくくなりますので、病院で診てもらいましょう。

熱があるときは小児科へ、熱がないときは耳鼻咽喉科で診てもらおうようにします。

アレルギー性鼻炎(小児の症状・治療)

アレルギー性鼻炎とは？

アレルギー性鼻炎とはアレルギーによって、鼻粘膜に炎症が起きる病気です。

アレルギー疾患の1つで、小児のアレルギーは花粉の他にも、ダニ、ホコリ、などが原因となることがあります。

小児のアレルギー性鼻炎の原因が花粉の場合はマスクの使用が有効ですが、ダニやホコリの可能性がある場合は部屋をこまめに掃除することが大切です。

慢性中耳炎(小児の症状・治療)

慢性中耳炎とは？

慢性中耳炎とは、中耳炎が慢性化して中耳粘膜に炎症を起こし、鼓膜に穴が開いたままになるものです。

慢性中耳炎では急性中耳炎から発生することが多く、慢性化膿性中耳炎と真珠腫性中耳炎に分類されます。

慢性化膿性中耳炎とは鼓膜の裏側に膿がみられ、真珠腫性中耳炎では鼓膜の奥に真珠みたいな膿のかたまりがみられます。

難聴(小児の症状・治療)

難聴とは？

難聴とは耳の聞こえがよくない状態をいいます。

難聴は両耳に起こるとは限りません。両耳に起こることもあれば、片耳だけの場合もあります。

難聴には先天的な難聴と後天的な難聴があります。

先天的な難聴には中耳奇形、外耳道閉鎖、風疹による影響などがあります。

後天的な難聴には滲出性中耳炎、慢性中耳炎、アデノイド肥大症、髄膜炎などがあります。

外来でよくある質問

「薬をどうしてもいやがるときはどうしたらいいの？」

- これも時々経験する困った問題です。年齢によっても対応法は変わりますので、3歳以下と想定して書いてみます。また、なかなか飲んでくれないケースを中心にとりあげます。
- まず水ぐすりでしたら、味見をしてみてください。通常はそのままか、少し水で薄めてあげますが、飲まない場合ジュースなどにまぜることをするかと思えます。この場合、混ぜる物によってはとんでもない味に変わることがあります。ですから、まずはじめに味を確認してみましょう。次に、味に問題がない場合ですが、お子さんがジュース類を嫌いな場合、これはなかなか大変です。多くの水ぐすりは、ジュースの味にしようとしているからです。この場合

は、粉薬(ドライシロップ)にしてもらうかスポイトで奥歯の付近で放す方法を試して下さい。スポイトを使っても舌の前の方で放しては意味がありません。べえと出されてしまうでしょう。のどの方へ薬が流れていくような位置でそっと放してやるのがコツです。うまくできたらほめてあげましょう。

- 次に粉薬(ドライシロップを含む)ですが、単に水で溶くだけで飲んでくれる場合もあります。それでダメなときには、お薬を少量の水で団子状にします。それを上顎やほっぺにこすりつけて、水かジュースで流し込む、この方法でうまくいくはずです。
- あとは、一般的な問題ですが、食後にこだわるとうまくいかないことがあります。おなかがいっぱいなのです。子供のお薬は食後にこだわることはありませんので、食事の前や食事と食事の間の時間に飲ませることも試してみてください。
- この他の方法としては、1回分ずつシャーベット状に凍らせる、ヨーグルトに混ぜる、アイスクリームに混ぜるなどがあります。
- 3歳以上になれば、きちんとお薬が必要な訳を説明し、納得できれば飲んでくれるはずですが、ただし、水薬よりも粉薬のほうが好きというような場合は、主治医にお願いして、できるものなら希望に添った内容にしてあげるとうまくいくかと思えます。
- 単なるわがままと言えるようなケースも時にみられます。このような時には親子関係の問題もありますが、場合によってはスパルタ式の教育的指導が必要かもしれません。ただし、感情的にはならず、きちんとしたフォローをお忘れなく。

「くすりだけください」

時々、薬だけくださいといわれます。我々医師は、薬局ではありませんから、診療して処方するというのが原則です。薬局で売っているいわゆる大衆薬や置き薬は、安全性を重視して、比較的安全な作用の弱めの薬を少な目の量に処方してあります。一方、我々の使う薬は、作用が比較的強いものが多いので、所見を確認してから処方しないと、薬が合わなかったりすると逆に症状が悪化することもないとはいえません。また、重い病気を見逃すもとですから、診察を受けないで、薬だけというのは好ましくありません。まして、薬を飲んでいてもあまりよくなるらないときなどは、診察が必要です。

「赤ちゃんに市販の風邪薬をのませてもいい？」

市販の風邪薬は、ほとんどのものが万人向けに効き目が穏やかで、副作用の少ない薬を安全を考慮して少なめの量で処方されています。また、鼻水・咳止め・熱さまし・痛み止めなど何種類もの成分が混ぜられているものも少なくありません。赤ちゃんの場合、お薬に敏感な体質かどうか分からないことも多く、できれば不必要な成分は飲ませたくありません。また、受診前にお薬を飲ませてしまうことで症状が修飾されてしまうこともあります。市販薬で様子を見ていうち、夜間に急に熱が高くなることはよく経験するパターンですし、赤ちゃんや子供は急に症状が悪化することが少なくありませんので、市販薬で様子を見ようは感心しません。夜間や休日に「どうしてもっと早く連れてこなかったの？」というせりふは日本中の小児科で聞かれているのではないのでしょうか。「はやめ、はやめ」が子供の病気の合い言葉です。

「いつから学校(保育園・幼稚園)に出しても大丈夫ですか？」

- 風邪の場合:熱が下がったあと、さらに1日様子を見てからにしてください。朝熱がなくても午後からでることが多いものです。まる1日熱がでなくて初めて熱が下がったといえます。
- げりとはきけ:特に食事の注意が必要です。良くなってから1日様子を見てからにするのが、無難だと思います。
- 咳がひどいとき:喘息性気管支炎などでは、幼稚園や保育園に行くどうしても走り回って咳き混みが激しくなる場合があります。そのような時はおうちで様子を見てあげてください。
- みずぼうそう:すべての皮疹にかさぶたがつくまで休ませなければいけません。かるい場合でも7日、通常10日ぐらいかかるのがふつうです。
- 風疹:発疹がきえるまでおやすみときめられています。
- 麻疹(はしか):熱がさがってから3日たつまでおやすみときめられています。
- おたふくかぜ:腫れがひくまで。但し、おたふくかぜによく似た病気に反復性耳下腺炎というのがあります。この場合は、休む必要はありませんので、かかりつけの先生に決めてもらってください。

- 手足口病:この病気は、なおってからもかなり長期間うつすことから、休まなくてはいけない病気には指定されていませんが、口の中に水泡ができて痛い時は休ませるのが無難でしょう。
- 伝染性紅班(りんご病):この病気の時にはほっぺが赤くなるころには、うつす時期を過ぎていますので、休ませる必要はありません。しかし、あまり真っ赤な頬の時は、対外的な理由などで休むざるを得ない場合もあるようです。
- 帯状疱疹:みずぼうそうと同じウイルスで病気になります。みずぼうそうになったことのある人が何年かたって再発したのが、帯状疱疹です。ですから、みずぼうそうにまだかかっていない人にみずぼうそうをうつしてしまいますから、みずぼうそうと同じにすべての皮疹がかさぶたになるまでは休ませてください。
- 百日咳:特有の咳がなくなるまでおやすみときめられています。
- インフルエンザ:熱がさがってから2日たつまでおやすみときめられています。
- 咽頭結膜熱(プール熱):特有の症状がなくなってから2日たつまでおやすみときめられています。

予防接種

- [各予防接種を受けさせる時期](#)
- [麻疹・風疹の予防接種\(MR ワクチン\)](#)
- [インフルエンザの予防接種\(小児の予防\)](#)
- [おたふく風邪の予防接種\(小児の予防接種\)](#)

各予防接種を受けさせる時期

小児が受ける予防接種は沢山あります。

そこで、「予防接種をいったいどのような時期で受けていけばいいか？」

について参考になるように紹介したいと思います。

生後3ヶ月～

定期接種の BCG、DPT(I 期)、ポリオ(小児まひ)を受けることができます。

BCC は生後6ヶ月になるまでに受けましょう。

任意接種では B 型肝炎を受けることができます。

各予防接種は受けてから次の予防接種まで間隔をあけないといけません。

<予防接種を受けてから次の予防接種まで空ける間隔>

BCG・・・4週間、ポリオ・・・4週間、DPT・・・1週間、B 型肝炎・・・1週間

麻疹・風疹の予防接種(MR ワクチン)

麻疹・風疹の予防接種 -MR ワクチンについて-

MR ワクチンは麻疹と風疹を同時に予防できるワクチンで、1 歳の時と小学校入学前の合計 2 回受けることになります。

麻疹は皮下注射で行います。注意していただきたいことは、MR ワクチンはウシや豚由来の成分を使用しているため、アレルギー体質の人は医師と十分相談しましょう。

インフルエンザの予防接種(小児の予防)

インフルエンザの予防接種について

インフルエンザの予防接種は基本的に流行し始める前の11月頃に受けるのが勧められています。また、インフルエンザにかかってからも予防接種することで症状を軽減できます。

インフルエンザの予防接種は一般的に間隔をおいて2回行います。

最初の予防接種を行った後、3～4週間後にもう一度行います。(1回で済む場合もあります。)

おたふく風邪の予防接種(小児の予防接種)

おたふく風邪とは？

おたふく風邪は、流行性耳下腺炎やムンプスとも呼ばれる感染症で、ムンプスウイルスの感染によって発病します。

おたふく風邪は、患者さんのほとんどが9歳以下の小児が感染する子供の病気で、おたふくのような顔に腫れあがります。

おたふく風邪で注意が必要なのは合併症です。

合併症には耳下腺炎、睾丸炎、卵巣炎、髄膜炎、脳炎、永久難聴などがあります。

まとめ

親にとって子供が病気になるととても心配になります。

どこが痛いのか、体がどんなふうにあるのか子供はうまく伝えることができません。

病気になって慌てるのではなく、

日頃の生活でかかりやすい病気は認識しておく必要があります。

子育てはとても大変です。

小児・子供の病気の回復に役に立てばよいと思います。